

一般社団法人

日本人間関係学会ニュース 第103号 発行日:2022.8.24

News No.103 Japan Association of Human Relations August 24 2022

発行: 日本人間関係学会 広報委員会 E-mail: tanikawa@kusw.ac.jp 関西福祉大学 谷川和昭研究室

事務局: 〒799-2496 愛媛県松山市北条660 聖カタリナ大学人間健康福祉学部 釜野研究室

E-mail: jahrijimukyoku@gmail.com URL: <https://jahr.jp/>

【内容】 ☆大会長挨拶 ☆第70回記念関西・東海地区会研究会 ☆北から、南から ☆順子の映画鑑賞記⑦ ☆事務局日より

《巻頭言》

日本人間関係学会第30回記念全国大会

大会委員長のご挨拶

一般社団法人日本人間関係学会第30回記念全国大会
大会委員長 早坂 三郎 (甲子園短期大学学長)



この2年間、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ソーシャルディスタンスをはじめ公共交通機関利用自粛などの理由により本学会も全国大会の開催を控え、会員のみならず社会の安全・安心に配慮してきたところですが、最近の急増する第7波への感染防止対策状況を踏まえ、今年度本学会の全国大会を対面で実施することについて理事会でご審議頂き、2日間のスケジュールを1日に集約し、懇親会等については残念乍ら全体では企画しない前提のもと開催計画を立案することでご承認頂きました。

つきましては茲に、大会参加書、口頭(研究・実践)発表申込書をはじめとする全国大会実施要項等のご案内を申し上げます。何より、日本人間関係学会第30回記念全国大会を令和4(2022)年12月3日(土)に甲子園短期大学で3年ぶりに開催できますことを大変嬉しく存じております。

さて、新型コロナウイルスによるパンデミックは長期に及ぶと考えられ、既に、日常生活に大きな影響を及ぼし、医療現場の逼迫は言うまでもなく、教育機関においては教育方法の転換、そして社会においても様々な対応と変化を余儀なくされています。

特に、本学会にとっても、ソーシャルディスタンスのパーソナルスペースへの影響や人と人との接触の機会が感染拡大の大きな要因となる事には困惑させられます。併せて、世界的には持続可能な

17の開発目標(SDGs)が掲げられ、教育貧困・食糧・健康と福祉・ジェンダー・エネルギー・環境・経済成長及び産業技術などの分野での目標達成に向け各国が取り組みを進めていますが、多様性の理解及び平和と公正を求めることによっても安全・安心で持続可能なコミュニケーションが豊かになると考えます。

加えて最近の異常気象による温暖化や強雨による災害、また地震の頻発、そして何よりウクライナの悲惨なニュースには信じられない思いばかりで、無力さを実感させられます。そんな最中、AI化による社会活動や生活への影響はとて大きく、コミュニケーションにも変化がもたらされている現今です。今大会のテーマを「変革期の社会を考えるー安全と安心のためのコミュニケーションー」とし、今後の本学会の役割と使命が、如何にこれからの社会にとって重要であるかの共通認識と果たすべき責務について考える機会にしたいと考えた次第です。

対面での大会開催に際しましては感染拡大防止対策について、皆様のご理解とご協力をお願いいたしますとともに安全で安心な大会運営に努めて参りますので、ご参加とご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、今回の全国大会のプログラムはコロナ対策と運営のため3つの講演を企画しましたが、何と言っても全国大会の華は口頭研究発表・口頭実践発表であります。学会賞や若手研究者のための奨励賞の選考をしますので、どうか要旨集へのご投稿をお願い致します。

第70回記念 関西・東海地区会と 東北地区会が合同研究会を開催

令和4(2022)年5月12日、日本人間関係学会関西・東海及び東北地区会会員に対して、日本人間関係学会関西・東海地区会会長の早坂三郎先生と日本人間関係学会東北地区会会長の鈴木満先生の連名で、第70回記念関西・東海地区会と東北地区会合同研究会開催のメール案内が発出された。

これは東北地区会の鈴木会長に早坂会長が相談とお願いをし、関西・東海地区会の第70回地区会と併せて東北地区会のリスタートを記念しての合同研究会の企画となった。

そして時は、令和4(2022)年6月4日(土)午後3時00分～午後5時30分、第70回記念地区会研究会では鈴木満東北地区会会長を講師に迎え「「わかりあえない」からはじめるコミュニケーション講座～ウィズコロナ・ポストコロナ時代の対人関係コミュニケーション～」というテーマでコロナ禍に配慮してZoomで開催された。

鈴木会長は、わたしたちの人生は、時にわたしたちの想像をはるかに超える出会いや出来事が起こることを具体例を挙げて説明され、今日の苦難や困難を伴う未知との遭遇は、わたしたちの成熟に向けた通過儀礼としてとらえられるかもしれないとした。



また、クランボルツの、キャリアの8割は自分自身の想定していなかった偶然の出会いや出来事によってつくられるといふブランド・ハップンスタンス理論(ハップンスタンス学習理論)を紹介され、ピンチをチャンスに変え、チャンスをさらなるチャンスにする人には、5つの要素があることを説明された。それは、①好奇心(何ごとにも開かれている心持ち)、②持続性(失敗を失敗とせず、ものごとをある程度続けることができる)、③柔軟性(状況や環境などの変化に合わせて、自分を変えることができる)、④楽観性(自分のコントロールできないことは手放せる)、⑤冒険心(とりあえずやってみる、どうなるかわからないけどやってみる)、であり、人生における出会いと出来事がポイントであるとした。

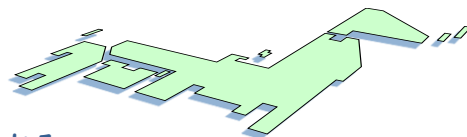
研究会では、Zoomのブレイクアウトルームで4つ程度の小グループに分かれてのトークなど、参加者は予期せぬ出会いや出来事を体験して、考えたことを話しあった。そして、参加者が話したエピソードは、ブランド・ハップンスタンス理論の5つの要素に当てはまるかどうかということを確認して、気づきや感じたことなどを楽しくシェアした。

閉講時には参加者全員が満面の笑みを浮かべているのが強く印象に残った第70回記念講演の地区会研究会であった。



北から、南から

天は自ら助くる者を助く——人は自ら努力することで、幸せになれる



新天地からの御挨拶

田中康雄(西南学院大学)

みなさま、こんにちは。福岡市にございます西南学院大学の田中康雄です。日本人間関係学会では、学会誌編集委員会に携わり、会員の皆さまの投稿論文から様々なことを学ばせていただいております。

さて、当方は、2020年4月に現在の福岡市の本務校に異動いたしました。それまでは、8年間、さいたま市の浦和大学で勤務しておりました。まさに、「北から南」ではなく、「東から西」へ移動しました。埼玉県は海がない地域でしたが、今の大学は、徒歩圏内に海があり、時折散歩し海を眺めては癒されているところです。

現在の本務校がある所在地は、福岡市地下鉄の西新駅からほど近い場所にあり、近隣にはサザエさんの作者である長谷川町子さんのゆかりの地としてサザエさん通り、PayPayドーム、福岡タワー等があり、何かと研究面以外の誘惑が多いです。

また、西新商店街があり、日々3万人近い歩行者が訪れているとされ、東京のおばあちゃん原宿と呼ばれる巣鴨地蔵通り商店街と同等の歩行者数ともいわれているようで、様々な地域でシャッター商店街が多いとされる中、賑わいをみせており、私も「さあ研究しよう」と気合を入れても、少し商店街の喫茶店に行ってからとついつい余計なことが長くなっている状況です。自分自身には、地域福祉の研究だと言い聞かせております。

加えて、興味深い史跡が学内や地域にあります。元寇防塁(げんこうぼうるい)と呼ばれる石塁で、文永の役(1274年)では元軍(モンゴル軍)が海から上陸し、戦場となり、その後、鎌倉幕府が再度の来襲に備えて博多湾沿いの海岸、約20kmに渡って築かせたそうです。現在、世界では、ロシアとウクライナの戦争が生じている中、今から約750年前にも、国をまたいだ戦いがあったと考えると、非常に考え深いです。

Withコロナの兆しが見える中、会員の皆さまで、福岡市にお立ち寄りの際は、是非お声かけ下さい。ソーシャルディスタンスを保ちながら、大学付近のおすすめスポットをご案内いたします。

最後に、今年度は、介護老人福祉施設の外国人技能実習生の人材育成システムの構築に向けた全国調査を行なっております。こちらにつきましても、ご関心のある会員の皆さま、是非情報交換させていただけると幸いです。

コロナ禍で人の人のつながりの希薄化が叫ばれる中、様々な方法を駆使し、日本人間関係学会ならではのつながり方で、会員の皆さまとつながりを深めていきたいです。今後とも何卒宜しくお願いいたします。



出所：西南学院大学ホームページ「施設：元寇防塁」，

<https://www.seinan-gu.ac.jp/introduction/facility/facility.html>

姪が産まれて

和香絢子(WA-Smile)

今年の5月の終わりに姪が産まれました。家族の中では9年ぶりの赤ちゃん、さらに今まで男の子だけでしたので初めての女の子の誕生ということで家族一同とても喜んでおります。

しかしながら、上の子が小学生ということもあり里帰りをすることなく自宅で育児をするようになった妹は退院後、程なくして心のバランスを崩してしまいました。

早めにSOSの連絡をくれたので、私と母が毎日通うようにしてすっかり元気になりましたが、SOSを出すことができなかったり、家族が近くになかったり様々な理由から一人で頑張っただけに悪化してしまうお母さんもたくさんいるのだらうなと感じました。

核家族化やご近所づきあいが薄れている現代、そこにコロナ禍が重なって他人にむやみに話しかけたり干渉したりしてはいけないような雰囲気すらあるように感じます。

赤ちゃんとはコミュニケーションは取れませんので、昼間赤ちゃんを二人きりの時間を過ごしているお母さんにとっては、誰か話し相手がいるだけでも気持ちが全然違うのだと今回強く感じました。

子供は国の宝と言いますので、自分の子ではなくても皆で育てていく気持ちを持って温かく見守ってあげられる世の中になると良いなと思います。

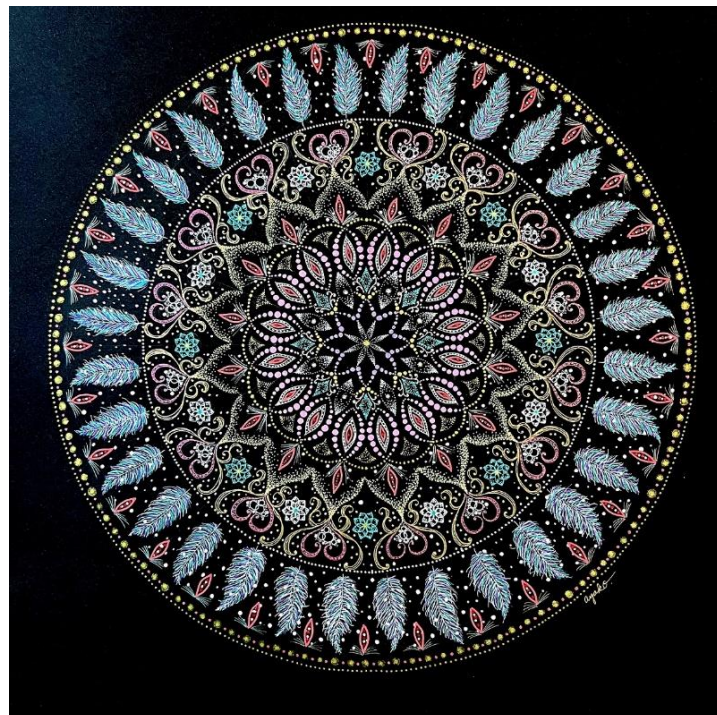
私も子供が小さいときに乗ったバスで座席が空いておらず困っていたところ、座っていたご年配の女性が息子を膝に乗せてくださったことがありました。

とてもありがたく嬉しかった思い出で、今でもはっきりと覚えています。

そんな息子も小学生となり、外出時には「小さい子が泣き止まなくて困っていたらあげるんだ」とお子様ランチなどのおまけのおもちゃをいつも持ち歩いています。

自分がいただいた優しさを、困っている方がいたら今度は差し上げる側になる、そんな循環ができたらいいなと願っています。

【点描曼荼羅アート作品】



第5福竜丸以外の船は意識から外されていた

濱田郁夫(元中学校教員)

本年度から当学会に加えていただきました。ご挨拶代わりに投稿です。よろしくお願いします。

私は、中学校で社会科を担当しておりました。1990年頃からビキニ水爆事件の調査活動を行っています。このことに関わるようになったのは、ビキニ事件というものは、第五福竜丸が被ばくした事件だと思い込んでいたのですが、そうではなく、当時の被爆した船は第五福竜丸だけではないということを「幡多ゼミナール」の高校生たちが発見した、という書物に出会ってからでした※1。

以来、当時のマグロ船の船員さんたちを訪ね歩き、なんという船にだれが載っていたのか、当時の操業の様子、水揚げした時の様子、その後の健康状態などについて聞き取りを行うという作業をしてきました。その中で明らかになったことは、全体的にガンや心疾患の発症が多くみられるということ、特に第5福竜丸の近くで操業していた船の船員さんはガンでなくなる割合が非常に高いということです。考えてみれば、1954年は水揚げされた魚はガイガーカウンターで検査し、多くのマグロが廃棄処分となっていたのです。それを漁獲していた船員さんも同じように被ばくしているのは当たり前と言えます。わかったことの二つ目は、そういう状況でありながら、その船員さんたちに何の補償も対策も取られていないということです。

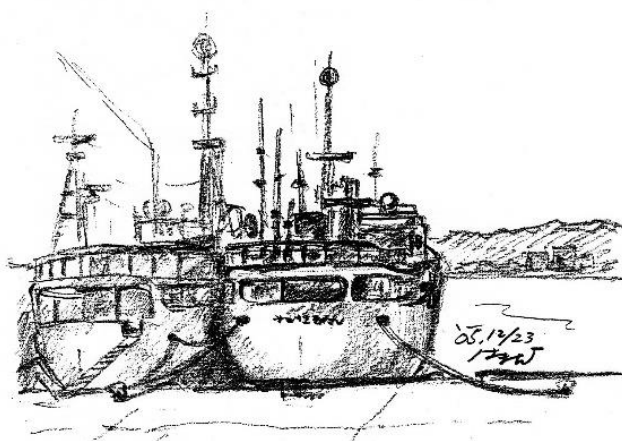
なぜ、補償や対策がとられていないのか。それは、多分「なかったことになっていた」からだと思われます。私自身、社会科の教員でありながらそのような事実を知らなかったし、疑うこともしなかったのですから。

最近、調査をしながら「なかったことになっていた」というのはどういうことだろうとよく思います。事実はいくつあるにもかかわらず、です。例えば、「室戸市史」の中にその記述はあるし、体験した人だって、私が調査を始めたころはたくさんいたのです。すぐそばに事実があるのにそれが見えていない。これは、意識から外されていたということです。私の場合は第五福竜丸が強く印象付けられ、そこに目線が行くことで、その周りのことが見えなかったということだと思います。かなり周到な「そらし」があったのだと思います。まふまふと「そらされていた」のです。

そのように考えると、「幡多ゼミ」の高校生や顧問の先生方はどのようにしてそらされていた事実をキャッチしたのか、再意識化させたのかということになります。この問いの解明はあらためてしたいと思いますが、いずれにしても1960年頃から40年、核実験を続けるためにそらし続けられたものが、彼らの発見によって多くの人たちが意識化し始めています。

私も、事実とその意味をつかみ取るために、この夏も室戸に足を運び聞き取り調査を進めていこうと思っています。

※1「ビキニの海はわすれない」(幡多高校生ゼミナール/高知県ビキニ水爆実験被災調査団編 平和文化 1988.3.1)



「私の癒し」

近藤重晴(東京福祉大学)

皆さん、こんにちは東京福祉大学(名古屋キャンパス所属)の近藤重晴です。
まだまだ出口の見えないコロナ禍ではありますが、今年度に入って学会や研修会などが対面で実施されることが増え、少しずつ日常が戻って来ているような気配もしています。

2年半前に始まった新型コロナウイルス感染症の影響により、人との関係が大幅に減少してしまい、時々連絡を取り合い会っていた人とも会う機会がなくなり、最近では連絡を取り合うこともなくなってしまった人もいるように感じています。皆さんはいかかですか？

人との接触を減らしてストレスがたまり、マスク不足でストレスがたまり、ストレスを発散することもできずに、もやもやしていた2年半だったと思います。

そして、一旦薄れた人との関係を再構築するのにストレスを抱えることになりそうです。



コロナ前は、妻と旅行に出かけることが好きで、ストレスの解消になっていましたが、この2年半は旅行にも行くことができずにストレスがたまるが多かったのですが…

題名の「私の癒し」ですが、ここ3年くらい私を癒してくれているのは、ウサギです。ロップイヤーという品種で、垂れ耳が特徴のウサギです。仕事から疲れて帰ってくるといつもおやつをねだって寄ってきます。

ウサギと触れ合うと疲れも取れるような気がしますし、自然とストレスも和らいでいるような気がします。

妻と二人でかわいがっていて、毎日夫婦で癒されています。

皆さんも癒されていますか？ 何かに癒されると心も体も落ち着きますよ。

たくさんの“偶然”の出会いから

川又幸代(東北地区会)

はじめまして。私は、仙台市に住んでおります川又幸代と申します。先日、「人間関係学会関西東海地区会」にオンラインで参加させていただきました。ご縁に感謝いたします。会員の先生方の貴重な、そしてとても勉強になるお話をたくさん伺うことができました。ありがとうございました。

まず、自己紹介をさせていただいてもよろしいでしょうか。私は、4人の子どもがおります。と言いましても、4人とももう成人しました。仕事は、自宅で小学生向けの学習教室をこじんまり開いております。あっと言う間に14年経ちました。昨年から「子育て講座」や「笑顔講座」をオンラインで開催しております。最近はノート術にハマっております、こちらも講座を開催しております。

4人の我が子が全員成人したということで、私もかなりの年齢になりました。でも、昨年からいろんなチャレンジが加速している状況です。「何歳からでも新しいことを始められるんだな～」と実感しております。

す。こんな私も、50歳の時は体調も好調ではなく、「ここからどんどんやれないことが増えていくばかりなんだろうな。もう、隠居だわ…」と真剣に思っていました。

そんな私が、なぜ今のように元気いっぱい！笑顔満開になったのか。“あること”との出会いが人生を変えてくれました。それを今日は書かせていただきます。

それは、ズバリ「コーチングとの出会い」でした。今回の講演をしてくださった鈴木満先生(ヒューゴ先生と呼ばせていただきます)、事務局をしてくださった阿部侑生先生(ユッキー先生)のコーチングスクール【ドリームフィールド】と出会ったことが、その後の人生を大きく変えたと言っても過言ではありません。

まず、「コーチング」という言葉を初めて目にしたのが、今から10年以上前です。偶然、図書館から借りた本(「子どもの心のコーチング」菅原裕子著)にとっても感動しました。当時、4人の子育てでいっぱい。その本に書かれていた「コーチング」という言葉から「私もこういう言葉がけで子育てしたいなあ」と憧れたのを覚えています。現実には、怒ってばかりの毎日でしたが。そして、「コーチングを学ぶ」ということまでは、頭も時間も追い付いていませんでした。

それが、数年後。4番目の娘が高校2年の時に、高校の役員をしました。そこで偶然出会った役員さんが、コーチングを学んでいたのです！そこから、ドリームフィールドを知り、ポンポンポンとコーチングを学べる環境がやってきました。「ずっとやりたかったコーチングを学べる♪」スキップしてドリームフィールドの門をくぐったのが3年前です。そこから生まれ変わることができました。

ドリームフィールドでは、コーチングのスキルやノウハウを学ぶんだと思っていたのですが、それだけではありませんでした。それ以上に「心の在り方」を学べたことが、私が生まれ変わったことに繋がっていると思っております。

私は頭がダイヤモンドのように硬く(笑)とにかく真面目なんです。自分の「正しい」を我が子にも押し付けていました。だから、ちょっとでも粹からはみ出ることがあると、怒ってばかり。そんな子育て時代でした。当時の自分は、最善を尽くしていたのですが。

でも「正しいことが正しいのではない」ということを、50歳半ばにして初めて気づきました。

コーチングスクール2年目の頃。ヒューゴ先生とセッションの練習をしていた時です。「もう、自分はこれだけ子育ても仕事も頑張ってきたんだから、そろそろ自分の好きなことをしてもいいのでは？」この言葉が、ふっと頭に浮かび、それをヒューゴ先生に熱く語っていました。本当に偶然頭に浮かんだ想いでした。

そして、50代後半の今。新しいことにチャレンジし続けています。偶然のご縁で、こちらの学会にも参加することができました。50歳の時に「もう隠居するから」と言っていた自分に見せてあげたいくらいです。偶然の出会いの積み重ねが、私の人生を彩豊かなものにしてきています。本当に面白いですね。

この文章をパソコンで書いている今日は、偶然ですが4番目の娘の20歳の誕生日でした。これも偶然でしょうか。これからの学会のますますのご発展と、みなさまのご多幸をお祈りいたします。お読みいただき、ありがとうございました。

オシだけのおとうさん

釜野鉄平(聖カタリナ大学)

人は成長するにつれて抱える役割が増えるといいますが、私の中で最も手を焼く大役となっているのが、仕事よりも父親業です。世のお父さんは初めての子育てに四苦八苦しますが、二人目を授かったときに直面するのが、上の子が兄(または姉)になることをどう受け入れるかということです。

うちには三人の子どもがいます。長男である息子が幼い頃は、思い切り遊ぶのは父親というような役割分担ができていたので、平日の夜はブロック遊びをし、休日は毎週のように公園へ一緒に出かけていました。それもあってか、息子は話したい話題がある時は「ねえおとうさん」と私を呼び止め、私が書斎で仕事をしていてもトイレに行こうとしてもそばに来て話を続けます。それはそれで愛おしく、なるべく会話を大切にしていました。

その息子が6歳になったときに、双子の妹が生まれて息子はお兄ちゃんになりました。娘に手がかかりながらも、夫婦で息子だけの時間も意識するようにしていたこともあってか、特に大きな不満を息子が口にすることはなかったのですが、娘が1歳を過ぎて言葉を発するようになり、私を声に出して呼ぶようになると、息子がポツリと「あ～あ、オレだけのおとうさんじゃなくなった」と漏らしました。

その時、とうとうこの言葉がでたかという思いと同時にある考えが思い浮かんだので、「そう？おまえのお父さんはお父さんだけだよ」と答えると、「だって、双子がいるじゃん」と不満そうにこちらを見る息子。「いやいや、妹はお父さんのことを“パパ”って呼ぶでしょ。だからお前のお父さんはお父さんだけ」と返しました。うちは共働きで、娘は1歳から保育所に通っていました。そこへ迎えに行くと、保育士の先生は「パパが迎えに来たよ」と声掛けをしており、いつの間にか娘は私をパパと呼ぶようになっていたのです。子ども騙しかなど思いつつ息子をみると、ニッと笑って「ねえおとうさん、新しいポケモンゲームでね」といつもの息子に戻っていました。

それが正解だったかどうかはわかりませんが、その後娘が成長するにつれて兄妹げんかも増えて喧^{やかま}しい限りですが、息子は中学生になった今も私を呼び止めるときは「ねえおとうさん」ですので、うちなりの親子関係はできたかなと思っています。

私にとっての“北から南から” 【Part 2 大阪篇】

田中典子(スクールカウンセラー)

前号で、北の札幌から始まった転勤帯同による転居ストーリーを記してきた。本稿では、転居6回目の大阪から始めたい、いや、大阪在住記としたい。豊中市のマンション15階に住いを得た我が家は、働き盛りの主人、幼稚園・小学校の子ども達といった家族構成。日中は時間が使える専業主婦の私は、転勤先で取得してきた資格を活かした教室を自宅開催、更に心理学を学ぶべく大阪大学に通っていた。

その日は、午後からフラワーアレンジメント教室の予定で午前中は花の仕入れ、と夢見心地の早朝5:46、それは突然、本当に突然やってきた。ドドーンと下から突き上げたかと思った瞬間、家中がジェットコースターのように揺れた。頭は真っ白、何が起きたかわからないまま我に返ると、私は肩と顎で何かを受け止めている。「タンスだ！」と暗闇の中、気付くと同時に荷物の海で動けない！ 何とか這い出し頭をよぎったのは「子どもは?!」。あまりに静かで、誰も泣かない、声もしない。瞬間、諦めた思いで「泣きなさい!!」と叫んだつもりが声にならない。後から分かったが、腰を抜かすと声は出ないのだ。「ママと言いなさい!!」反応はない。灯りのスイッチも所在がわからない。暗く呆然とした中、最初に声が響いたのは隣のお兄さんの叫びだった。「大丈夫ですかー？ 小さいお子さん居ましたよねー？」。どうやってドアを開けたのかわからない。お兄さんは(全棟停電していた)懐中電灯を頭に括り付け、我が家に来てくれた。声のなかった主人がやっと「大丈夫か？」と1人ずつ子どもを引っ張り出し、断裂した給水管のシュワシュワという音だけが響いていた。とにかく家族全員の無事を確認、実家らに無事を告げる電話の後、回線は繋がらなくなった。当時のブラウン管テレビは転がって映らない。わかったのは大きな地震が来て、ベランダから見た景色は変わっていたことだけだった。スーツなど見つけられない惨状で、主人はスウェッ

トの上下のまま、「とにかく職場に行く、後は任せた」と職場に向かった。日が昇り、ようやく室内が可視できてから、私は二度目の驚きを覚えたのだった…。

1995(平成7)年1月17日火曜日 5時46分 マグニチュード7.3
阪神・淡路大震災は起きた。被災経験は語り出せば尽きることはない。その後、私は大学の関係から神戸にボランティア参画し、その事が後の仕事のキャリア始点となったのである。きしくも1995年は、学校に教諭免許を持たない心理の専門職が配置された初年でもあった。食・住・健康への支援だけではなく、“心のケア”に関心が高まったのもこの震災以降である。平時の心のケアと危機的状況時の心のケア、専門家として何を行い、何を行ってはいけないか、尽きない学びは専門プログラムへと繋がった。2012年、ボストンのヴァンデ・コーク・トラウマ研究所にて研修を受け、日本では国家心理資格等、複数取得して現在に至る。その後の東日本大震災やコロナ・パンデミック。コロナにあっては、学校休業でも勤務は続き、面接予約は絶えることが無かった。本来、私の専門性を活かす機会は、無いに越したことはない。穏やかで笑顔の絶えない生活が続くよう願って、Part2の筆は置きたい。7回目の転居以降は、またいずれ…。



猫とコーチングと私

三尾 多恵子(東北地区会)

猫と暮らし始めてから2年半が経ちます。名前はじろう。やんちゃな男の子です。初めて会った時、わたしはこの子と暮らすために家を猫仕様にしたのだ！と運命を感じるほどの出会いでした。毎日楽しく暮らしていますが、なぜ？と頭を抱える状況に遭遇することもしばしばあります。人間同士でさえ相手のことが分からないと感じて頭を抱えることがあるのですから、猫と人間では致し方ないのかもしれませんが。わたしがコーチングを学んだきっかけも人間関係で悩んだことでした。周囲との関係をうまく築くことができず、頭の中はいつも大混乱。どうしたものかと途方に暮れる日々を送っていました。

そんなとき偶然にもドリームフィールドにたどり着くことができました。どのような在り方で相手と関わっているかという、心の態度を大切にされている先生方からコーチングを学べたことはとても幸運だったと思います。コーチングやコミュニケーションを学び始めてから、自分特有の思い込みやルールに囚われていたこと、また無意識のうちにそれを相手にも強いていたことに気づかされることが多くなりました。

もしかしたら分かり合えないかもしれないという可能性を抱きながら、それでも分かりたい・共有したいと願い関わり続けること。且つお互いの違いに驚きつつも相手を尊重することができたなら、これまでとは違った関係を育んでいけるのかもしれない。まだまだ学びの最中ではありますがそんなことを思えるようになりました。

これからもじろうとの暮らしで頭を抱える状況に遭遇すると思います。それでも彼にはのびのびと、好奇心いっぱいに過ごしてほしい。そのために観葉植物や家具の配置を変えることなど、然もないことのような気がしてきました。だってわたしが大切にしたいのは彼との関係であり暮らしなのですから。最後に最近知ったグツとくる一文で締めたいと思います。

変えることができるものは、変えていくことのできる力を。変えることができないものは、それを受け入れる勇気を。



出逢いと学び

堀籠ゆかり(東北地区会)

日本人間関係学会東北地区会の会員になることを突然知らされ、先日開催された関西・東海地区会研究会でのZoomミーティングに参加させていただきました。

突然とはいえ、楽しいことが始まる予感と期待が先に立ち、お断りするという選択を全く持ち合わせてはいませんでした。私の予感と期待通りの展開に、これから先に起こるかもしれない出来事にもワクワクせずにはいられません。お誘いいただき、ありがとうございました。

私は、宮城県の医療情報ネットワークの一般社団法人に所属しておりまして、ふだん、基幹病院のブースにて患者様にシステムの説明を行っています。

その中で、あらゆる年代、あらゆる環境、あらゆる思いと接するわけですが、当然お一人お一人接し方や話し方への変化が必要となってきます。

宮城県にありますコーチング研修会社ドリームフィールドで鈴木満先生、阿部侑生先生から学んだスキルを活かしながら、目の前にいらっしゃる方に丁寧に関わろうと、日々取り組んでいるところです。

コミュニケーションについて学んだり、壁にぶつかる度に私は人間関係の難しさを思い知ります。それは、意識せずに言葉にしていたり、甘えなんかも入ってみたりと近い関係であればあるほど問題を抱えやすくなってしまいます。

あなたとわたしの間に問題があると言う事は、近い存在なのだと気づくことで少し距離を置いてみる、使う言葉を考える。そんなことが冷静にできるのであれば、私の問題は解消されるのかも知れません。

が、しかし。私は遠い存在には冷静になれても、近い存在にはそんな神様のような対応をできる自信がないのです。それでも、神様に近づくべくたくさんの方々と出会い、ずっとコミュニケーションを学び続けていく人生になると思います。

今回、このタイミングで皆様とつながることができたこと、そして、この機会を作ってくださいました先生方に深く感謝申し上げます。

学会ニュースは年2回発行（2月・8月）

「北から、南から」の原稿は会員であれば、どなたでも投稿できます。

お寄せいただきたいのは、**400～1,000文字**程度です。多少オーバーしても大丈夫。

日々の生活で感じたことや、思い浮かんだこと、作品などお便りに載せてください。

1月末までの投稿分は2月発行のニュースに掲載されます

7月末までの投稿分は8月発行のニュースに掲載されます

送付先 広報委員会（谷川）まで tanikawa@kusw.ac.jp

順子の映画鑑賞記

第7回 トップガン マーヴェリック
を鑑賞して 橋本順子



皆さん『トップガン マーヴェリック』をご覧になられましたか。世界各国でヒットし、日本においては現在、1億円の興行収入を得ており、間違いなく2022年度のナンバー1の映画と言える作品だと思います。

1986年に公開された『トップガン』の36年ぶりの続編となります。舞台は海軍エリートパイロットの養成学校。続編では、トム・クルーズ演じる教官のマーヴェリックと訓練生との師弟愛、友情が描かれます。かつて、エースパイロットであったマーヴェリック。親友のパイロットの死により、挫折、孤独の中にいましたが、再起を図り、若きパイロットたちを指導する姿は感動的ですし、わかりやすいストーリー展開となっています。

還暦、60歳を迎えたトム・クルーズ(撮影時は55歳)。スタントやCGを多用しない体当たりの演技を思うと、トム・クルーズの俳優としての矜持が感じられます。戦闘機使用は軍の許可に1年以上かけ、搭載専用カメラを開発するなど、撮影に関わる裏話や苦労話は数多にあります。

ここではあらためて、ヒューマンリレーションズ的に、「繋がり」「結びつき」というワードから、本作品を考えてみたいと思っております。マーヴェリックは養成学校に教官として戻ってきましたが、訓練生の中に、かつて、マーヴェリックとの飛行中に命を落とした僚友グースの息子ルースターの姿があったのです。

ルースターは、マーヴェリックに恨みを抱いており、彼と対峙します。確執のある敵対する相手とどう向き合うかは本当に難しいものです。そのうえ、お互いを意識するライバルの存在も絡み、マーヴェリックに反発し、葛藤し、戸惑いながらも彼に心を開いていくルースターの姿は、バトンが繋がっていくような感動と共感を覚えます。

さて、訓練生との関係に悩むマーヴェリックでしたが、助言を求めた相手はかつてのライバルであり、親友であり、唯一の理解者でもある、アイスマンです。(本作品においては、続投のキャストはアイスマンことヴァル・キルマーのみ) 実際に喉頭がんで闘病中のキルマー。声を出せない中で器具を使つての会話。この出演は奇跡であり、ストーリー展開においても深い友情の結びつきを感じさせます。

アイスマンとの再会によって、どのように訓練生を導いていけばいいのかをマーヴェリック自身が答えを得て、チームは良好な関係になり、まとまっていくのです。教官と若き訓練生とのやり取りを見るだけでも価値がある作品だと思います。

一人ひとりの隊員の自らの生き方が、困難な任務を前にして示されていきます。まさにパイロットの哲学「人間愛」が描かれていると思います。そして、マーヴェリック自身の挫折、再起、成長も感じられます。この映画の根底にあるメッセージは、何年たっても年齢を経ても人間は成長できるということなのです。

戦闘機の爆音、突き抜ける青い空、どこまでも深い海。映像、脚本、メッセージ性、小道具、俳優陣どれをとっても完璧な作品でした。

【キャスト】

・トム・クルーズ＝マーヴェリック
・ジェニーファー・コネリ＝ペニー
・グレン・パウエル＝ハングマン
・パル・キルマー＝アイスマン

・マイルズ・テラー＝ルースター
・ジョン・ハム＝サイクロン
・ルイス・ブルマン＝ボブ
・モニカ・バルバロ＝フェニックス



事務局だより

【会員動向】（2022年2月21日～2022年8月20日）

2022年8月20日現在

会員122名（正会員：102名 一般会員：10名 準会員：10名 賛助会員：0）

〈入会者〉 正会員：1名 ・近澤 優子（敬称略）

準会員：1名 ・石川 美希（敬称略）

〈退会者〉 4名（正会員：2名 一般：1名 準会員：1名）

〈自然退会〉 18名（正会員：12名 一般：4名 準会員：2名）

前号（第102号）の学会ニュースにおいて、「事業年度・会計年度の変更」についてお知らせしました。その後、皆様に通知いたしましたがお手元に届きましたでしょうか。本学会の事業年度・会計年度は4月1日始まり～3月31日締めとなりました。但し、令和3（2021）年10月1日から令和5（2023）年3月31日までの1年6か月間につきましては、令和3（2021）・令和4（2022）年度としております。改めまして、ご理解の程、宜しくお願い申し上げます。

第30回記念全国大会について

新型コロナウイルス感染症禍において、「第28回全国大会」は誌上発表、

「第29回全国大会」はオンライン開催と、形式を変えて実施してきました。

「第30回記念全国大会」は、3年ぶりに対面形式で開催することとなりました。

学会ホームページに大会プログラム、発表・参加申込書等、掲載しております。

(<https://jahr.jp/taikai/>) ご確認いただき、是非ご参加ください。

会場でお会いできますことを楽しみにしております。

皆さま、健康にはくれぐれもご留意ください。

（編集後記）

31年前の1991年8月24日のこの日、ソビエト連邦からウクライナが独立しました。一刻も早く平和が築かれるよう願っています。さて、今号について「巻頭言」のとおり、理事長の早坂三郎先生を大会委員長に迎え第30回記念全国大会が甲子園短期大学を会場に開催されます。12月3日に対面ということで、ホップ・ステップ・ジャンプ（1・2・3）というリズムが脳裏に浮かんできます。第70回記念関西・東海地区会研究会は無視（6・4）できぬ6月4日に東北地区会と合同で和やかさが増しました。「北から、南から」へ、ご寄稿いただいた皆様には本当に感謝感激でした。とくに東北地区会からは3名便りを寄せてくださいました。毎号お馴染みになってきた「順子の映画鑑賞記」は彼此7回目を数えます。橋本順子氏に毎回ご厚情を賜り、厚くお礼申し上げます。（谷川和昭）